

片平 観平 — 白石の町の水を豊かに —

今から約二百年前の江戸時代後期、片倉家の治める白石の町は、大雨のたびに白石川が氾濫し、人々は水害に苦しんでいました。

当時白石では、白石川より二十メートルも高い所にあった町の中に水を引くため、川に堰を作っていたん水をせき止め、水位を上げて用水路に流す方法を取っていました。それが、蔵本村大堰です。しかし、その方法は土嚢を積み上げ、くいでとめるといった簡単なものでした。大雨が降ればひとたまりもありません。堰は押し流され、堤防がこわれ、大堰の周りの家や田畑が水びたしになりました。そうなる
と白石川の用水路しか水源のない下流の町の人々は、毎日の飲み水や洗たくなどの生活用水にも大変不自由しました。

また、いったん火事が起きると消火のための水もありません。人々は不安な日々を過ごす
ごさなければなりません。そして、何より農業用水が不足し、農作物もとれなくなってしまう。凶作が続いたその当時、堰がこわれるということは、白石の人々にとっては、命にかかわる大きな問題でした。しかも、洪水は数年に一回、ときには一年に二度も起こることがありました。そのたび、堰の修理にかり出される人々の苦労も大変なものでした。

「堰がこわれたぞ。」

「また、田んぼがやられてしまう。」

「町にもどろ水があふれてくるぞ。」

その様子を見て、片平観平はつぶやきました。



工事前の蔵本村大堰と用水路

土嚢：
土をぎっしりと
めたふくろ。

「また農民がづらい目にあう。」

観平は、片倉家の家臣として産業を盛んにする仕事をしていました。大雨のたびに農作物の不作や、何度もくり返される堰の工事に苦しむ農民の姿を目の当たりにしていた観平は、何とか人々を救うことはできないものかと考えていました。

「大堰ばかりにたよらずに、白石川の水を引くことはできないだろうか。」

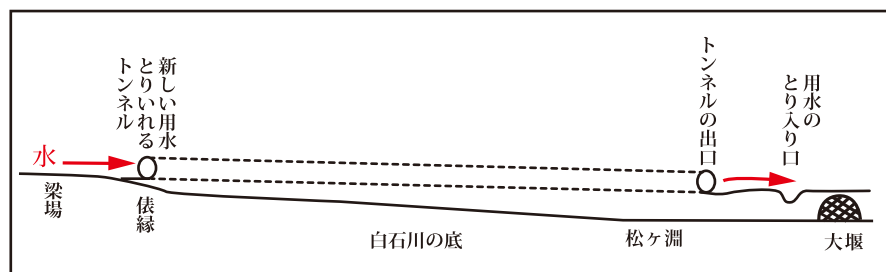
天保元（一八三〇）年、六十歳を過ぎ、すでに隠居の身だった観平は、蔵本村大堰の改修工事をすることを決意し、領主に願い出しました。計画は、当時の大堰の上流にある俵縁から松ヶ淵にかけて、白石川の右岸の岩かべに隧道（トンネル）をほり、白石の町に水を引こうとするものでした。隧道があれば、大雨が降っても、大堰がこわれても生活などに必要な水に困ることはありません。しかし、岩をほり進めなければならぬその計画は、当時の工事の技術からするとかなり難しいものでした。

また、工事を進めるにはお金が必要ですが、当時の片倉家は財政的に大変厳しい状態にありました。観平は考えこむことが多くなりました。

「資金がないのなら、わたしがお金をすべて出します。ぜひやらせてください。」

と観平は領主に申し出ました。観平は自分の財産を投げうってその費用にあてようと考えたのです。そして、息子の友英とともに工事にあたりました。

機械などまったくなかった当時のこと、槌とのみだけの手作業でほり進める工事は、困難を極めました。また、ほった岩くずを隧道から運び出すことも大変な作業でした。天保二（一八三一）年には蔵王が噴火し、その夏には洪水にもみまわれました。隧道は何度もくずれ、そのたびに工事はやり直しになってし



隧道の横図

隠居…
仕事をやめたり、跡取りに家の権利をゆずったりして引退すること。

槌…
柄のついた物をたたく道具。

まいりました。また、工事に取りかかったところは、東北地方で大飢饉が続いた時期で、
飢えで死ぬ人が増え、人口が半分に減ってしまう村が出たほどでした。

「また、飢え死にしたものがたぞ。」

「食べるものが何もない中で、どうして工事などすることができよう。」

人々はたび重なる災害にうちひしがれていました。食べるものも足りない中で
は、隧道工事を続けるなど、とうてい考えられない状態でした。工事をする人夫
を集められず工事が遅れてしまうこともありました。

「これ以上はとても無理だ。」

「もう工事は中止した方がよいのではないか。」

そうした声が観平の耳に入ってくるようになりました。さすがの観平もしばら
く考えこんでしまいました。

(こんなときだからこそ、ここでやめるわけにはいかない。この工事は、白石の人々を救うことになる)

観平はこう自分に言い聞かせました。

観平は、息子の友英と力を合わせてさらに工事を進めていきました。片倉家も領民一人当たり一日二合のお
助け米を配り、人夫を集めやすいよう工事の後押しをしました。工事を始めてから十年になろうとしたころには、
観平は財産のほとんどを使い切ってしまった。それでも借金をしてまで工事を進めました。

ところが、もう少しで隧道が完成するという日、白石はまたしても大雨にみまわれました。

(この大雨でまた隧道がくずれてしまわなければよいが)



飢饉…
農作物が実らず、
食物がなくなり
飢えに苦しむこと。

二合…
茶わん四はいくら
い。
お助け米…
家臣を助けるため
に、家族の人数に
よって与えた米。

観平は、気が気ではありませんでした。

翌朝、観平は急いで隧道に向かいました。観平は目を見張りました。大雨で水が勢いよく流れこんだため、なんと隧道が貫通していたのです。

観平は、しばらく流れこむ水を見つめていました。

隧道の長さは約二百五十間（約四百五十メートル）にもおよぶものでした。着工から十年が過ぎ、観平は七十歳になっていました。

観平は、七十一歳で亡くなりました。観平の偉業は、白石城下の神明社の大鳥居のすぐ左側に建てられた石碑によって、後世に伝えられています。

観平が完成させた蔵本大堰切通トンネルは、白石の人々から親しみをこめられて「切通」と呼ばれています。切通から流れる水は、白石の町の中の水路に引きこまれています。初夏には、この水面に澄んだ清い水にしか咲かないといわれている梅花藻という梅の花に似た、かれんな花が咲いています。今でも年二回の「川干の日」には、観平の志を受けついで市民の手によって水路のそうじが行われ、きれいな水の流れを守る努力が続けられています。



切通の出口

片平 観平

片平 観平は、江戸時代の終わり、片倉家に仕えた。観平は、水害に苦しむ白石の人々を救うため、私財を投げうって治水工事を行った。その後、十年の年月をかけ苦難を乗り越えて「蔵本大堰切通トンネル」は完成した。地元白石の人々は、これを「切通」と呼び、現在も大切に利用している。



片平翁の石碑

偉業：
すぐれた仕事。

後世：
後の時代の人。

川干の日：
水底の土砂や岩石をさらい、川をきれいにする日。